

## 第2章 アサバスカ大学の遠隔教育

吉田 文 (メディア教育開発センター)

### 1. アサバスカ大学の沿革

アサバスカ大学は、カナダのアルバータ州のアサバスカに所在する州立の公開大学である。カナダの高等教育はすべて州に依存しているが、このアサバスカ大学も1978年に、アルバータ州大学法の認可を受けた。それに先立つ1972年から75年までは、650人の学生を擁した公開大学の試験期間があり、1977年に2人の卒業生を出している。

アサバスカ大学は、アルバータ州第4番目の大学であるが、4番目の州立大学をという需要はすでに1960年代から起きていた。1970年に一旦、公開大学として開校したものの、キャンパスをもつ大学に比較して入学者が伸び悩んだ。そこで、1972年から75年までは、公開大学としての効果的な教育方法や学習方法の研究をおこないつつ、実際に学生を教育するという試験期間に移行したのである。

当初は、アルバータ州の州都のエドモントンに位置していたが、州の大学分散政策により、キャンパスをもたないアサバスカ大学は、エドモントンから約150キロメートル北のアサバスカという町に移転したのである。それにもない、衛星による学習センターがカルガリー、エドモントン、フォートマッコリーに設立された。

また、1994年にエドモントンに近いセント・アルバータに革新経営センターが設置され、そこを基盤としてMBAプログラムが開設された。

アサバスカ大学は前述の通り州立大学であり、大学法に基づいて大学管理運営審議会に学位授与権と管理運営権が認められている。アサバスカ大学管理運営審議会のメンバーはアルバータ州政府によって任命され、議長1人、一般州民8人、大学教員2人、学生1人、チューター1人、事務職員1人から構成され、全般的な大学政策、教学面の方針、地域社会との連携方針などを審議する。

こうした経緯で設立されたアサバスカ大学は、これまで制限されてきた高等教育へのアクセスの障害を除去し、居住地域や以前の教育歴の如何にかかわらず成人学生の教育機会の平等化を促進することを目的として掲げている。アクセスの容易さ (Accessibility)、学習の容易さ (Flexibility)、廉価な教育 (Affordability) が合言葉となっている。

遠隔教育機関としての特徴を最大限に活かすだけでなく、他大学と同様の教育の質の高さの維持と、高等教育機関としての研究の維持、ならびに地域のコミュニティへの貢献を使命として掲げている。

### 2. 学生層の特徴

現在、在学者は約20,000人、1972年以来、約140,000人がアサバスカ大学で学んでいる。その学生の指導ならびにサポートする教職員は610人である。

学生の内訳は、1998-99年度において33,620人が各コースに登録しており、それは1995-96年度の21,797人と比較して大幅に増加している。

学生の出身地はアルバータ州が57.5%で最も多いが、それ以外にオンタリオ州が14.4%、ブリティッシュ・コロンビア州が8.4%、サスカッチャワン州が8.3%、それ以外のカナダからが11.3%、カナダ国外が3.4%である。州立大学ということもあり、半数強の学生は州内出身者で占められるが、逆に州立大学という点からすれば半数近くが州外、それもインターナショナルな範囲で学生の出身地が広がっていることが注目される。

学士課程に入学した学生の教育歴は、高校ないしそれ以下が14%、何らかの中等後教育が67%、大学レベルが18.9%であり、多くは高校卒業後何らかの中等後教育を受けている。

学生の性別は、女性64.3%、男性35.7%であり圧倒的に女性が多い。これは、女性の方が高等教育の機会から排除される確率が高く、それを後年になって埋め合わせる手段として遠隔教育を利用しているものと思われる。

それは学生の年齢層からも確認できる。25歳以下の学生は31.1%に過ぎないが、25～34歳が35.1%、35～44歳が23.9%、45歳以上も9.9%とであり、3分の2が成人学生から構成されている。

### 3. 遠隔教育プログラム

アサバスカ大学から提供されているプログラムは、大学院レベルでは、経営学、遠隔教育学、保健学の修士課程と、それぞれのディプロマ・プログラム、また、情報技術経営 (Information Technology Management) のディプロマ・プログラムがある。

学士課程では、経営学、人文学、商学、自然科学、看護学、一般研究 (General Studies) がある。学士課程のプログラムで興味深いのは、伝統的な大学と同様に一般教育と専攻とを120単位履修して学士号を得るプログラムがあるのはもちろん、アサバスカ大学で90単位を取得し、あとは他大学の単位を累積して学士号を取得するプログラム、2年間の専門職業的なディプロマを取得した後に、それをもとに学士号を取得するプログラムなど、さまざまな方法で学士号が取得できる仕組みが作られていることである。

さらに、会計学、経営学、コンピュータ、リハビリテーション、健康科学、カウンセリングなどの資格プログラムがある。

単位を発行するコース数は全体で、400を上回るという。

これらのプログラムをみてもわかるように、多くが職業ないし専門職関係のプログラムであり、遠隔教育は成人学生の職業訓練的な要素を強くもっているのである。

プログラムは、毎年新たに増加する傾向があり、それは職業上の需要と不可分に結びついている。

### 4. コースの開発

遠隔教育のコース開発に関しては、きわめて入念な手続きを経て開発されている。一言でいえば、ある授業を担当する教員個人の興味関心だけではコースとして成り立たない仕組みとなっているのである。遠隔教育の場合、一旦開発して提供したコースは数年継続するし、その内容は教材などを通じて多くの人々の目にさらされるだけにその内容・質に関して敏感にならざるをえない。

アサバスカ大学ではコース開発の7段階といているが、プランニングからはじまって、議論の末にコースの開発の承認に至るプログラム開発段階（1～2段階）、次に、コースのアウトラインを決定し、徐々に具体的に詰めて教育工学専門職のサポートのもとにコース教材を作成するコース開発段階（3～4段階）、実際に授業の各場面に提供して使用し（5段階）、その後、学生を主体とした評価を行う段階（6段階）、その後、問題点の修正・改訂をおこなうコース改訂段階（7段階）の順序を踏んで開発される。

## 5. 教材制作

コース開発の手続きからもわかるように、遠隔教育にとってコース開発にともなう教材開発（必ずしも、コンピュータ関係の教材を使用するわけではなくとも）は、コースの成功を左右する重要なキーである。したがって、アサバスカ大学でも教育工学担当室という部署が、教学担当副学長、副教学担当副学長（Associate of Vice President, Academic）のもとにおかれており、編集、教育工学、著作権、映像デザイン、教授デザインなどの専門職から構成されている。これらをベースにしてコース・チームが編成されコース開発・教材制作がおこなわれる。こうした教材制作の専門職を大学内における仕組みがあつてはじめて、組織的に（教員個人のボランティア的な努力なくして）一定の質を保った教材がつくられていくのである。

また、印刷・編集などをおこなう部署も自前でそろえており、大学内ですべて教材の制作が可能となっている。これは、アサバスカという田舎町のため、外部に発注するような企業がないことにもよるが、一貫した制作体制をとることで各箇所でのさまざまなフィードバックが可能となり、良質な教材が制作されるのだという。大きな企業がないこの町では、大学がこのような組織をもつことが雇用を創出しているという副次的な効果もある。

## 6. 学習支援システム

遠隔教育の教育面での重要な要因がコース開発と教材制作だとすると、学生の学習を成功させる要因は、自学自習をどのように支援するかにあるといえよう。

アサバスカ大学のプログラムの提供には、2種類ある。1つは自宅学習方式（Home Study）、もう1つはペース配信方式（Paced Study Delivery）である。自宅学習方式は、個人で時間を配分して学習をすすめる期間内におわらせるものをいう。1学期に3～5コース履修するのがフルタイム、1～3コース履修するのがパートタイムであり、学生はどちらかを選択できる。3単位相当のコースは半年で、6単位相当のコースは1年で履修しなければならない。

その場合、最初にすべての教材（学習ガイド、教科書、参考文献、課題のマニュアル、オーディオ・ビデオ・テープ、CD-ROMなど）が送られ、自分で学習をするわけだが最初にチューターが割り当てられる。チューターとは、カナダ・アメリカ合衆国のどこからでも無料電話で相談可能であり、近年では電子メールもチューターとのコミュニケーションに利用されるようになってきている。

ペース配信方式は、学生のグループワークが課される方式である。学生は、一緒に学習のスタートを切り、一緒に修了する。学生は、教授者（Instructor）と対面でコミュニケーションをとりながら、あらかじめ決められたスケジュールにそって課題を提出したり試験を受けたり

する。教授者（Instructor）と対面する場所は、各地の学習センターやアサバスカ大学が場所の提供について提携している大学をはじめとする機関である。

大半のコースが、家庭学習方式とペース配信方式を併用しており、同じ内容をもつコースが、学生の選択に任されているのである。

大学院のプログラムになると、コンピュータを利用し、教材の配信、バーチャルな環境でのグループ・ワークやチューターとのコミュニケーション、課題の提出や試験の受験などが行われている。インターネットが、学生と教員・チューターとのコミュニケーションを活性化するのである。

学習を成功させる一つの秘訣が、このチューターである。教員1人では、コースに登録している学生の質問にすべて答えることは不可能であり、また十分な学習相談をする時間をとることも困難である。それを助けるのがチューターであり、多くは大学院生がチューターの役割を果たしている。

個々のコースを超えて、どのようなコースをとったら適切か、どのような学習資源を利用するのがよいのかなどについては、アドバイザーを利用できる。学習センターに出向いて相談することも、電話や電子メールによって相談することも可能である。

将来の職業選択など、自学自習の時間配分、学費支援の相談などは、カウンセリング・サービスが利用できる。

また、コンピュータを利用した教育では、コンピュータ利用上のトラブルが発生する場合がある。こうした問題に対処するのがヘルプ・デスクである。ここへは、電子メール、ファックス、電話で常時相談に応じてくれる。

このように、多様な形態の学習を支援する仕組みがあり、それが利用したいときにいつでも利用できるようになってきていることが重要である。

## 7. コースの配信技術

それぞれのコースがどのような技術を利用して配信されているかについては、コースごとに決まっている。先にあげた、家庭学習方式とペース配信方式とで異なるだけでなく、コンピュータ・ネットワークを利用したオンライン教育に利用されているヴァイタル（ViTAL、Virtual Teaching and Learning）というソフトウェアを利用しているコースなどの区別がなされているだけでなく、それが、実験を伴うものか否か（さらに、その実験が家庭学習方式によるのか、ペース配信方式によってどこかの場所へ集合して行うものかの違いも明記されている）、コンピュータが必要か、あることが望ましいか、オーディオやビデオが必要か、コンピュータがインターネットに接続されているべきかなどについて明記されている。

学生は自分の学習環境を考えながら、要件を満たすどのコースを履修するかを決定できる。全体的な傾向からみれば、インターネットに接続したコンピュータの利用は、まだ、大学院を中心としており、それ以外のコースやプログラムでは不可欠の要件とはなっていない。技術的な発達がいち早く取り入れられるとともに、昔ながらの印刷教材を主とする方式を欠いて、遠隔教育を広く行うには至っていないのである。

## 8. コスト

大学にとって、大学院のプログラムにかかわらずそれぞれの教育プログラムがどの程度コストに見合うのかを事前に検討することは重要である。アサバスカ大学の場合、州立大学であるため基本的な予算は州政府から配分されるが、大学院のプログラムに課されるのは、何年で収支が見合うようにできるかという問題である。それはストレートに授業料に投影される。基本的な収入は授業料に依存するからである。MBAのような雇用者が負担する場合のコストは高く、プログラムとして十分にペイするだけでなく、ペイしないプログラムを補充したり、大学の余剰財産として蓄積されたりするという。

ただし、この場合コストとして計上されるもののうち、もっとも多くを占めるのは新たに発生するスタッフ雇用の費用である。コンピュータ技術面での施設・設備はそもそも大学が全体として設置しているし、教材制作のノウハウ、スタッフ、設備すべて自前でやっているからである。むしろ、教材制作に関していえば、新たなプログラムが開設されることでそれなりの便益があるのである。

大学院の学生には、コンピュータやモデムの用意が要件とされているが、そのことは学生の負担にはなっていないという。学生として入学してくる職業人はすでに職場においてコンピュータを利用しているため、あらたにコンピュータ・リテラシーの獲得が必要とされることがないだけでなく、自宅においてもネットワークに接続されたコンピュータを利用しているのが一般だという。それは、北米地域におけるコンピュータの普及の度合い、コンピュータ本体だけでなく回線使用料の安さによるものである。

学生にとって、遠隔教育機関で学習することがどれだけ廉価であるかが、授業料などについてオン・キャンパス型の大学と比較すれば明白である。たとえば、4年間の学士号のプログラムにかかる授業料や教科書代は、アサバスカ大学では15,028カナダ・ドル、伝統的な大学では平均して17,866カナダ・ドルである。これそのものは、必ずしも大きな違いではないかもしれない。アサバスカ大学が強調する大きな違いは、キャンパスに在籍することによって発生する部屋代・食費代、また、その間職業に従事していれば給与として得られる放棄所得分を加えると大きな違いになるというのである。同じ高卒で、就職し、かつ、アサバスカ大学で学ぶ者と、伝統的な大学に進学した者とは、1年間にかかる部屋代・食費代が4,043カナダ・ドル、放棄所得分が30,418カナダ・ドルとなり、合計でアサバスカ大学の学生は3,735カナダ・ドルですむのに対し、伝統的な大学の学生は、38,827カナダ・ドルかかるという。

10倍以上の差があることが強調されているが、これは高校卒業後大学へ進学するかしないかの選択肢として機能することはあまりないであろう。しかし、高校卒業後に就職した者が、大学で学習しようとする場合には、きわめて魅力的なものとして機能するだろう。

## 9. 社会的需要

専門職大学院を特徴とすることの背景には、それを必要とする社会的需要があることが不可欠の要件である。アサバスカ大学の各大学院プログラムはいずれも、事前のマーケティングを行って、慎重な審議を経たうえで開設されているが、それによれば、専門職大学院への要望が高いことが示されている。

そうした要望が生じる源泉には、大学院の学位をとることが職業機会の改善に結びつくという社会システムの存在がある。自己投資としての教育であるとともに、職業訓練としての教育でもある。それが、社会的にあるいは職場において認知されれば、MBAのコースに典型的にみられるように、雇用者側が授業料を負担してまで被雇用者に学位をとらせているのである。

当然のことながら学生の授業への参加意欲は高く、そのモチベーションを前提として授業全体が組み立てられていることを特記すできである。やる気のない者のやる気をどのように引き出すのかといった議論は、ここでは論外である。

とはいっても、これをさして企業側の学歴の処遇と教育内容との間に、技術機能主義的関連が存在しているのだということは早急に過ぎる。専門職大学院であるがためにその教育内容が職業内容と強く関連しているか否かは、もっと微細な検証が必要だからである。

#### 10. 学生からみたアサバスカ大学

このような特徴をもつアサバスカ大学であるが、学生にはどのような大学とみえているのだろうか。それを、1999年にアルバータ州政府が行った、州内の4年制高等教育機関8校の学生7,056人を対象とした大学に対する満足度調査の結果から検討しよう。

まず、大学に対する全般的な満足度について表1のように8項目をあげてきているが、そのうち2項目を除いていずれも、アサバスカ大学の学生の満足度は他の7大学の平均を大きく上回っている。とくに、コースが幅広く提供されており利用しやすいうえに、内容が適切であると評価されているのである。

オリエンテーションや学生組合の点においては、学生が集合する場がきわめて限られているだけに、他大学よりも満足度が低くなることはやむを得ないであろう。

表1 全般的な満足度

[%]

項目	アサバスカ大学	他7大学の平均
1. コースの適切さ	95	67
2. 教育の質	86	73
3. 在籍した経験	90	78
4. コースの利用のしやすさ	81	56
5. 提供されているコースの範囲	82	59
6. 学習へのアドバイス	74	56
7. オリエンテーション	56	69
8. 学生組合	36	39

(「非常に満足」+「満足」の合計)

教育面に対する満足度については表2にあるように、教授者のプレゼンテーション、学生の処遇、学生に対する評価、教授者の有用性の4側面についてそれぞれ数個の項目をあげて満足度を聞いているが、おしなべてアサバスカ大学の学生の満足度は、伝統的な大学の学生のそれ

を上回る。とくに、教授者のプレゼンテーションでは、「プレゼンテーションの面白さ」、学生の処遇では「学習の進捗に対する関心の度合い」、学生に対する評価では、「評価の公平さ」、「成績発表の早さ」、「有用なフィードバック」とほぼすべての項目について、アサバスカ大学の学生の満足度は、他の7大学の学生の満足度を20ポイント前後も上回っている。教員と学生とが対面してコミュニケーションをとる機会が少ないだけに、興味深いプレゼンテーション、学生の学習の進捗状況のケア、正当性をもつ評価はいずれをとってみても重要な項目である。教育面での十分な配慮がなされていることがうかがえる。

表2. 教育面に対する満足度

項目	アサバスカ大学	他7大学の平均
[%]		
教授者のプレゼンテーション		
1. 内容の構成	92	80
2. 概念説明のわかりやすさ	85	71
3. プレゼンテーションの面白さ	83	58
4. プレゼンテーションの熱心さ	70	66
学生の処遇		
1. 質問への明解な回答	89	74
2. 学習の進捗に対する関心の度合い	73	56
3. 学生への援助	76	72
4. 学生を尊敬をもって扱う	92	84
5. 学習相談の利用のしやすさ	79	78
学生への評価		
1. 評価の公平さ	85	67
2. 成績付け作業のはやさ	80	64
3. 有用なフィードバック	84	65
教授者の有用性		
1. コースの明解な目的	92	83
2. コースの目的にみあう	95	81
3. 教授者の多くが有用	83	74

(「非常に満足」+「満足」の合計)

しかし、だからといって、アサバスカ大学が何も問題をもっていないというわけではない。表3にみられるように他大学よりも評価が低いものとしては、学習プログラムのもつ便益や技能の獲得の程度についてきた項目にみられる。

たとえば、学生が履修している学習プログラムのもつ便益については、6項目のうち4項目までがアサバスカ大学の学生の方が便益があるとしているが、専門領域に関する深い知識を付与するか否かという点で、アサバスカ大学は他大学よりも劣るとする結果がでている。

表3. 学習プログラムの便益

[%]

項目	アサバスカ大学	他7大学の平均
1. 全般的な自己改革の機会	93	84
2. 職業機会の改善	73	68
3. 収入の向上	73	68
4. 学習継続の機会	91	82
5. 職業に必要な技能の付与	55	57
6. 専門領域に関する深い知識	64	70

(「大いに当てはまる」 + 「当てはまる」の合計)

技能の獲得の面では、コミュニケーション、思考と学習、コンピュータ・数学能力、パーソナルな技能、チームワークやリーダーシップ、認識の広がりなどの6つの側面について、それぞれ2～3の項目、合計17項目について、それらの能力や技能を獲得できたと思うか否かをきいている。

それを表4からみると、アサバスカ大学の学生の方が技能を獲得したとする項目は、17項目のうち、効果的に書く(86%>72%)、創造的に思考する(79%>69%)、自主的に学習する(93%>87%)、自主的に労働する(94%>87%)の4項目のみである。これらは、自学自習という環境においてより要請される技能や能力であるが、遠隔教育機関に学ぶ学生では学習の課程でおのずから獲得しているのだといえよう。

他の13項目はいずれも伝統的な大学の学生の方が、技能や能力を獲得したと回答する学生の比率が高い。なかでも、差が大きいのは、すなわち、アサバスカ大学の学生の方が十分に能力を獲得していないとされる項目は、効果的に話す(45%<69%)、人間関係能力(50%<74%)、他者と共同(53%<77%)、異文化の適切な認識(45%<62%)などである。これらは、いずれも対面式のコミュニケーションの場が多いほうが身につくと考えられる能力や技能である。

遠隔教育機関に学ぶ学生は多くが有職成人であり、その年齢と環境において、いわゆる社会化能力の獲得が不可欠とされているわけではないが、それでも他者とのコミュニケーションの少なさがこうした反応を生み出しているのであろう。



表4. 技能の獲得

[%]

項目	アサバスカ大学	他7大学の平均
コミュニケーション		
1.効果的に話す	45	69
2.効果的に書く	86	72
思考と学習		
1.問題解決	82	82
2.創造的に考える	79	69
3.自主的に学習	93	87
コンピュータ・数学・研究		
1.コンピュータ技能	49	54
2.数学的能力	39	39
3.研究能力	75	78
個人的な能力		
1.自信の獲得	76	75
2.自主的な労働	94	87
3.人間関係能力	50	74
チームワーク・リーダーシップ		
1.他者と共同	53	77
2.リーダーシップ能力	54	61
3.紛争解決能力	50	55
認識の広がり		
1.政治的・社会的関心	50	50
2.異文化の適切な認識	45	62
3.倫理的な意識	64	68

(「大いに獲得」 + 「獲得」の合計)

これらの調査の結果から、アサバスカ大学は、遠隔教育機関であっても伝統的なキャンパス型の大学と同程度ないしそれ以上に、学生の教育という点において機能しているといえよう。それは、「もし、再度選択が可能であったら、あなたは同じ機関を選択しますか?」という問いに「はい」と回答した学生の比率は、アサバスカ大学では95%、それに対して他大学の平均は83%であることに端的に示されている。

有職成人を対象としているため、その需要に応じた適切な教育内容が求められる点や、学生の多くが過去に中等後教育の経験をもっている点からみて、大学に対する評価は、青少年が多い伝統的なキャンパス型の大学の学生以上に厳しくなると考えられる。にもかかわらず、こうした高い満足度が示されていることに、アサバスカ大学は、ミッションに掲げられているアクセスの容易さ (Accessibility)、学習の容易さ (Flexibility)、廉価な教育 (Affordability) を成

功させる努力が実っているということができよう。

**【参考文献】**

1. Athabasca University (brochure) .
2. Athabasca University, General Catalog, 1998-99.
3. アサバスカ大学のホームページ {<http://www.athabascau.ca/main/intro.html>}、  
{<http://www.athabascau.ca/reports/survey99.htm>} .
4. Athabasca University, Course Materials Production Policy (University Council of Center Chairs) , 1997.
5. 教学担当副学長、アラン・デイヴィス、教学担当副学長補佐、ピーター・クックソン、大学秘書、トマス・ブッシュへのヒアリング。